

0.1.2 歳児の 子育て広場作 りのポイント

多くの親子が一緒に遊んで、おしゃべりすることは、子育ての思いを共有でき、自然に不安を軽減したり、親がリフレッシュしたりすることに役立ちます。友だち作りに発展する機会にもなります。



■感染症予防■

乳幼児が集まるところでは、感染症の予防や衛生管理への配慮が大切です。

【表示】 会場入口の目につくところに、感染症予防のための「感染症が治って間もない人、2週間以内に患者さんと接触した人は参加をご遠慮ください」などの注意書きを掲示します。

【排せつ物、吐物の処理】 ノロウイルス対策が基本となります。赤ちゃんには生理的にみられる吐乳などもあるので、子どもの様子を観察しながら対応します。

吐いた親子を責めたり、落ち込ませたりしないように配慮しながら、消毒などをします。

【おもちゃの消毒、洗濯、保管などの衛生管理】 口に入れることが多いので、使用後におもちゃの消毒、洗浄をします。とくに乳児のおもちゃは、ほこりがかぶらないように気をつけて保管します。

【地元の感染症の情報収集】 保育園、幼稚園、保健所などをとおして、感染症の流行状況の情報を集めておきます。参加者に注意をうながすと同時に、スタッフもすみやかに対応できるように備えます。



イラスト：いがき けいこ

親も、子どもも のびのび楽しく過ごせる場が基本

0.1.2 歳児の“子育て広場”作りをするためには、子どもの成長や発達について理解することが重要です。0.1.2 歳児は、成長・発達の個人差が大きく、とにかく自分の好きなように動き、遊びたがるのが特徴といえます。

子どもが自由にのびのび遊ぶためには、親がそばにいてくれるという安心感が欠かせません。子どもの様子を見守ったり、話をしたり、遊んだりする親のかかわりは大切です。そのような親子がのびのびと気兼ねなく、ともに楽しく過ごせることが、“子育て広場”作りの基本といえます。会場作りや運営のポイントを整理しました。これを参考に、それぞれの現場に合った“子育て広場”を工夫してください。

●安全な居場所を確保する—— 事故防止、感染症予防、応急措置、防災対策など

■まだ歩けない子どもの安全な居場所の確保■

0.1.2 歳児は、寝たままの赤ちゃんから、おすわり、はいはい、つかまり立ち、伝い歩き、そして自由に歩いたり、走ったりする子どもまで、行動の形もいろいろです。元気に動き回る子どもにも、寝ている赤ちゃんが踏まれないかと冷や冷やしたり、間違っ

て踏まないように子どもの動きから目を離せない親など、親同士も落ち着きません。参加者が気兼ねなく、ゆったりと過ごせるように、子どもの行動の形にあわせて、会場を仕切ることも必要です。会場全体が、なごやかな雰囲気を保つように、ぶつかっても痛くない素材でできた長椅子や柵などで仕切ります。

□ 0.1 歳児の昼寝□

0.1 歳児は、昼寝の時間と重なることがあります。タオルなど、上に掛けるものを用意し、親のそばで寝かせるようにします。親も目が届き、周りの人との会話を続けることができます。

おやすみコーナーを別に用意してもよいのですが、安全のために親の付き添いが必要になります。

部屋が複数確保できるなら、別室にする方法もありますが、兄弟姉妹で利用する場合を考えると、仕切りがある同室のほうがよいかもしれません。

■安心・安全のために■ ※一般的に家庭の事故防止対策と同じです。事故が起きないように、安全面にも気を配ります。

【転落】 階段、大きな段差などには柵を設け、行けないようにします。外に出ないように、扉を閉めた方がよい場合もあります。

【誤飲】 飲み込んでしまう大きさのおもちゃは、危険なので置かないようにします。歩ける子どもが、他の場所から持ってきてしまうこともあるので、注意が必要です。

【感電】 感電の危険があるので、コンセントをふさぎ、コードに触れないようにします。

【落下】 子どもが立って手を伸ばせる棚の上に、物を置きません。落してケガをする危険があります。

■利用ルールを明確にします■

参加者が気持ちよく広場を利用するためのルールを明確にします。ただし、規制が多いと過ごしにくくなります。0.1.2 歳児の特徴を踏まえた上で、安心・安全にかかわる最低限のものにとどめます。

【おむつ替え】 場所や使用済みおむつの処理方法。

【授乳・飲食】 場所やお湯などの利用方法。ごみの処理など。

【写真撮影】 最近は、スマートフォンや携帯電話で、気軽に写真撮影ができます。自身のブログやフェイスブックにアップする人も、少なくありません。写真撮影の可否、可の場合でも相手にことわってから撮るなどの、ルールを決めておくことも必要です。

■応急処置・防災対策■

応急処置ができるよう救急箱を常備します。また、地震・火事などの防災対策（避難経路・避難先・誘導方法など）は重要です。

●楽しく、のんびり過ごせる雰囲気を作る おもちゃ、ショートプログラムなどで環境作り

■子どもたちが自由に動けるようにする■

歩けない子どもは布マットなどの上に寝かせて、自由にさせます。親も、子どものそばに足を崩して座り、くつろいでもらいます。

親子の輪(グループ)を作る方法は、3～5か月児、6～8か月児、9～11か月児などと月齢ごとに座ってもらう方法、居住地ごとに座ってもらう方法など、いろいろあります。子育て広場の目的や、会場の広さなどに合わせて工夫します。

歩く子どもたちは、靴を脱いで床や畳の上で動き回れるようにします。

【子どもは“薄着”が望ましい】

空調管理(温度・湿度など)がされている室内では、子どもたちを“薄着”にすることが望ましいといえます。子どもたちの基礎代謝は高く、よく動くので、汗をかきます。ほつべたも赤みをおびてきます。せめて、親と同じ枚数か、1枚ぐらい少なめにするのが良いでしょう。“はだし”も、おすすめです。



※室内が、室温 23 度・湿度 50%前後で管理できていれば、赤ちゃんはおむつ 1 枚の裸にしても良いでしょう。寝てしまったら、バスタオルをかけた後、服を着せたりして、裸のままにしておきません。

■月齢や年齢に合ったおもちゃを置く■

月齢や年齢にあわせて、おもちゃを用意します。子どもたちは、プラスチックや木、布のおもちゃ、絵本など、単純な仕様のものを喜びます。

【おもちゃのとりあい】

子ども同士で、おもちゃのとりあいをする場面もよくあります。興味あるものにすぐ手が出る、そして人に譲れないという 1.2 歳児では、あたりまえの光景です。そのときには、すぐにやめさせないで、子どもたちの様子を見守ります。

ものを振り回したり、髪の毛を引っ張ったり——危ないかなと思ったときには、声をかけて離します。

歩けない子どもたちのためのおもちゃは、マットの真ん中に置くようにします。親子が自然にその周りに座って、輪になりやすくなります。親が子どもを囲むように座ると、歩き回る子どもが入ってくるのを防ぐ“仕切り”にもなります。

【手作りおもちゃ～飲料用の紙パックを使って】

1,000mlの飲料用の紙パックをきれいに洗い、よく乾燥させたのち、なかにビーズ、ペットボトルのキャップや鈴を入れます。もう一つの紙パックをかぶせるようにかみ合わせ、中身がこぼれないように、幅広いテープでしっかりとめます。

持って振ったり、ブロックのように積んだりできる、音の出るおもちゃになります。お座りできるころから歩ける子どもまで、幅広い年齢で楽しめるおもちゃです。



■BGM■

親が口ずさみやすい、童謡がお勧めです。親が歌えば子どもも体でリズムをとったり、踊ったりします。

■ショートプログラム■

“子育て広場”は、親子が自由に過ごせることが基本です。しかし、親の好奇心や向学心を満たし、親子のかかわりを深めるために、10～15分くらいの“ショートプログラム”を加えると、より楽しいものになります。

“ショートプログラム”とは、手遊び・歌遊び、運動ふれあい遊び、人形遊び、読み聞かせなど、よく親子プログラムで行われているものの〈短縮版〉です。

全員を参加させる必要はありません。“子育て広場”のなかで、他の遊びに夢中になっていたり、プログラムに興味を持たなかったりすることが、よくあるからです。自由参加を原則とします。

【人見知りをする子ども】

人見知りの程度は、初対面ではわかりません。そこで、最初のあいさつでは、子どもの目を見ないようにして、親に向かって笑顔であいさつします。スタッフと親が、楽しそうに話をしていると、子どもも少しずつ慣れてきます。すると、ほとんどの場合、いつの間にか泣かないで、遊び出すようになります。

■食事コーナーの設置■

外出しても、食事の時間を変えないことは、安定した生活リズム作りには大切です。0歳児は、離乳食の回数も時間もまちまちなので、できれば常設するのが望ましいでしょう。

スタッフの心がまえ

□あいさつ、笑顔、そして気配りが基本です□

“子育て広場”の運営スタッフは、集まった親子がリラックスして楽しいひとときを過ごせるようにするために、お母さんたちをさりげなく援助する必要があります。

- 一目でスタッフと分かるように、同じエプロンやトレーナーなどを着用します。名前は、角のあるカード入れを使うのではなく、シールなどに書いて衣服の上にはるようにします。
- 長い髪は束ね、爪は切っておきます。アクセサリーなどの突起物、香水はつけないようにします。
- 親子と接するときの基本は、あいさつと笑顔です。
- 親子のなかに入り、できるだけ参加者全員に話しかけるよう努めます。
- 「おうちでも、一人でよく遊ぶの？」など、子どもの様子

を話のきっかけにすると、話がしやすくなることもあります。

- 親の話をよく聞きます。「～をしないといけない」「～はダメ」などと、断定したり否定する言い方をしないようにします。
- 親から質問をされて、答えに困ることもあります。そのときは、周りにいる親に「みなさんはどうしていますか?」と意見を聞いて、親同士の会話につなげるきっかけにします。
- 親が「どうしたらいいのでしょうか?」と迷っている場合、「お母さんはどうしたいと思っているのですか?」と聞き返してみるのも一つの方法です。
- 1組だけで来た親子が疎外感や寂しさを感じないように、参加親子の様子を気にかけて、会話の機会を増やします。
- すべての親が話をしたいわけではありません。無理に話に引き込まず、子どもと遊びながらかわっていくのも良いでしょう。